【特別企画】池田満寿夫 生誕80周年記念

陶芸家池田満寿夫を もっと知りたい

前編　般若心経シリーズ

取材協力／パラミタミュージアム、池田満寿夫記念館、増穂登り窯

パラミタミュージアム1階第2室

1993年12月、山梨・増穂登り窯にて地蔵制作中の池田満寿夫。撮影:太田治孝

池田満寿夫（いけだ　ますお）

1934 年満州に生まれ、終戦とともに母の故郷・長野市に引き上げます。その後、画家をこころざし東京藝術大学を受験しますが 3 度とも不合格。辛苦のすえ独学で版画を学び、版画家として出発します。1960、1962、1964 年、東京国際版画ビエンナーレ展で連続受賞を重ね、1966 年 32 歳で棟方志功に次いでヴェネチア・ビエンナーレ展で国際版画大賞を受賞し世界的なアーティストの名をほしいままにします。その後、小説『エーゲ海に捧ぐ』で芥川賞を受賞するなど、小説家、映画監督、絵画、陶芸まで幅広く創作活動を展開します。1997 年 3 月、63 歳の若さで急逝。

1997年3月、池田満寿夫、急性心不全による急死。享年63歳。溢れんばかりの才能を遺憾なく発揮し、その人生を自由奔放に駆け抜けていった芸術家 池田満寿夫。惜しくも63歳という若さで急逝してから、17年の年月が過ぎました。

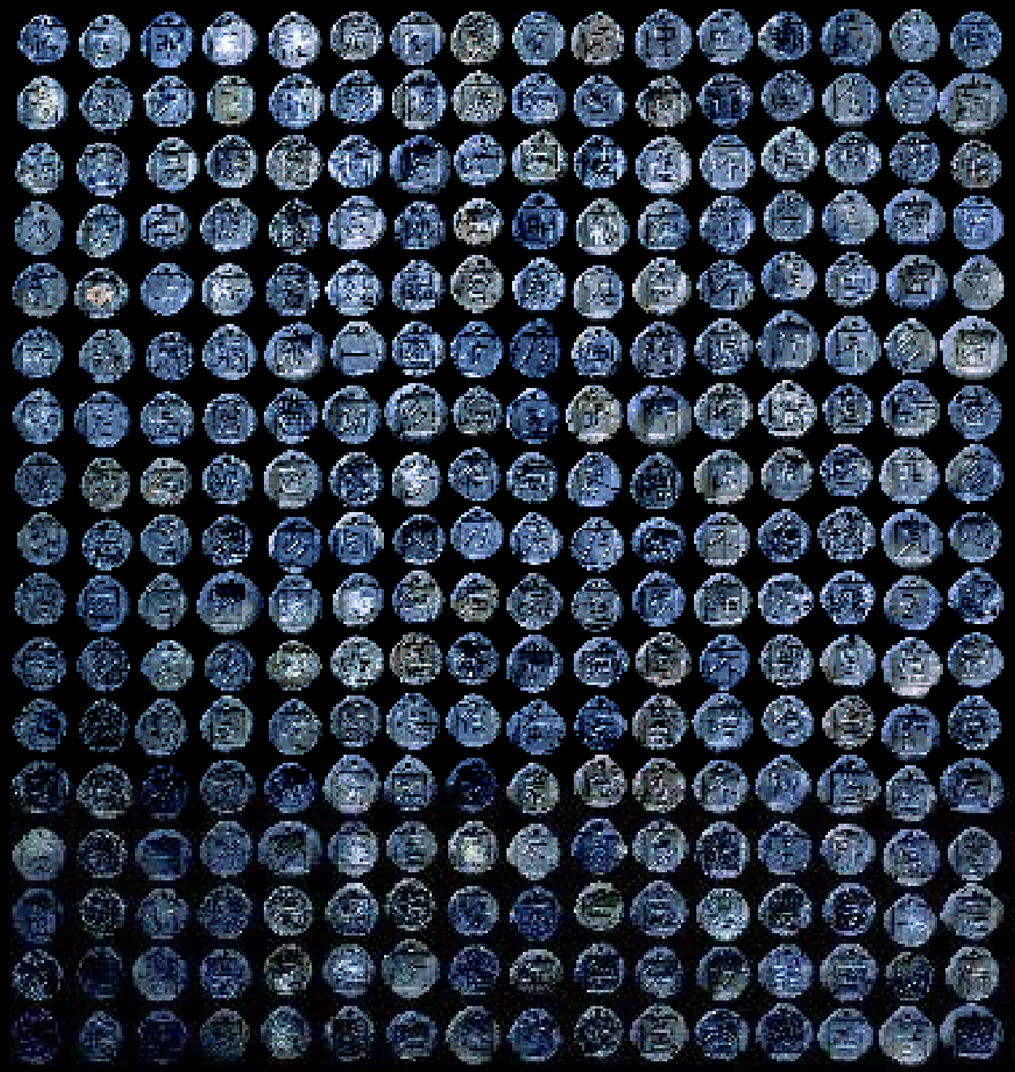
今年は、池田満寿夫生誕80周年となる記念すべき年にあたります。

本誌『陶遊』では、池田満寿夫が晩年没頭したといわれる陶芸作品の中から「般若心経」シリーズと「土の迷宮」シリーズにスポットを当て、前編・後編の2回にわけて紹介していきます。

池田満寿夫が私たちに遺していったものは何か？　池田満寿夫が愛した人、愛したことを本編にいっぱいつめて。

3月にパラミタミュージアムで開催された
「パラミタコンサート特別企画 佐藤陽子ヴァイオリンコンサート」にて。

心経陶片



心経陶片　各）直径約 5cm 1994 年制作 焼成：炭化窯

陶芸は「日本回帰」だった

池田満寿夫といえば、最初に思い浮かぶのは「版画」だろう。だが、池田が晩年の14年間、全身全霊をかけてのめり込んだのが「陶芸」である。

ざっくりと土を切り裂いて丸めた大胆な形状。茶褐色に発色した土肌が何とも美しい。照明を浴びて静かにたたずむその姿に息をのむ。紛れもない陶芸家としての池田満寿夫が象徴されているように感じる。

版画や油彩、コラージュなど西欧の近代美術の影響が大きく受け、洋のイメージが強かった池田満寿夫だが、日本の伝統への感心を高まらせるきっかけとなったのが、陶芸だった。

自ら陶芸への挑戦を「日本回帰」と名付け、その影響は版画など陶芸以外の作品にも波及し

地蔵の版用の石膏（1993 年 12 月）撮影：太田治孝

心経片の焼成作品（1994 年 8 月）撮影：太田治孝

心経碗

心経碗　各）直径約 15cm 1994 年制作 焼成：炭化窯

ていったという。

陶芸のスピード感に魅力を

49歳の時に、日本クラフトの誘いで静岡県南伊豆町の岩殿寺窯で、池田は初めて陶芸に取り組んだ。これがきっかけとなり、一気に陶芸にのめり込んでいく。

「インスピレーションと成り行きで、手が自由に動く」

考えたことがすぐに造形表現できる陶芸のスピード感に、池田満寿夫は魅力を感じたという。

1986年に静岡県の熱海市に「満陽工房」を作り、電気窯とガス窯で旺盛な作陶活動を開始する。

増穂登り窯で人生初の薪窯を経験

1990年には、かねてより親交のあった太田治孝氏に協力し、山梨県増穂町（現 富士川町）に増穂登り窯を築窯。そこで人生初の薪窯焼成を経験し、その効果を実感する。だが、そのいっぽうで池田は、従来の薪窯焼成で良しとする灰かぶりや火色による耀変など、炎には頼ら

焼成された神々の器「心経碗」（1995 年 2 月）撮影：太田治孝

心経碑

前列左から）
心経碑　縦 24× 横 21cm 1994 年制作 焼成：炭化窯
心経碑　縦 17.5× 横 14cm 1994 年制作 装飾：金箔 焼成：八方窯
心経碑　縦 30× 横 22cm 1994 年制作 焼成：炭化窯

後列左から）
心経碑　縦 18× 横 15cm 1994 年制作 焼成：八方窯
心経碑　縦 28× 横 17cm 1994 年制作 焼成：八方窯
撮影：南川三治郎

地蔵

地蔵　縦 32× 横 17× 奥行き 12cm 1994 年制作
焼成：八方窯

地蔵　縦 29.5× 横 13× 奥行き 10.5cm 1994 年制作
焼成：八方窯

ず、造形そのものをシャープに土味そのものを生かすことを望んだ。

炭化窯と『満寿夫八方窯』

したがって、焼成方法は段階を追って進化を遂げていき、やがては理想の黒色を求めて炭化窯が築窯された。

炭化焼成によって誕生したのが心経陶片（54ページ参照）や心経碗（55ページ参照）、心経碑（56ページ参照）など、渋みのある黒や茶を基調とし、秘めたる原始のパワーを放つ。

そして1993年、四方八方から薪を投げ入れられる『満寿夫八方窯』を設計、築窯。高さ1メートル級の大作も焼成可能になり、大佛塔や「古代幻視」シリーズなど、タタラを積み重ね、大胆に削ぎ落とし、あえて亀裂を生じさせ、荒々しい土の表情そのものを引き出した作品群が誕生した。

「地蔵」を乾燥中（1993 年 12 月）
撮影：太田治孝

心経陶板

心経陶板　各）縦 26× 横 12cm 1994 年制作 焼成：電気窯

佛画陶板

佛画陶板　各）縦 26× 横 12cm 1994 年制作 焼成：電気窯　撮影：南川三治郎

佛塔

佛塔　縦 77× 横 25.5× 奥行き 48cm 1994 年制作 焼成：八方窯

1996年の終わり頃から体調を崩し始め、翌年1997年3月、急性心不全で帰らぬ人となる。あまりに早い死だった。

生涯にわたり、表現者として真摯に、貪欲に生きた池田満寿夫。遺されたこれらの作品と対峙することで、これまで知り得なかった陶芸家としての池田満寿夫の顔を知ることができるだろう。

ポップアート調から落書き風、エロティックな描写など色彩乱舞な「版画」とは対極に、陶によって表現された「般若心経」シリーズは、厳かで静謐、宗教的な雰囲気に包まれる。心経陶片、心経陶板、心経碗、心経碑、地蔵、佛塔、大佛塔、書などで構成された極めて深遠なこのシリーズは、池田満寿夫の陶芸の代表作とも位置づけられている。

陶に刻まれた「般若心経」の文字には、池田満寿夫の仏への崇高な思いが刻み込まれ、見ていると心が浄化されていく思いがする。

焼成した佛塔群を洗う（1994 年 9 月）
撮影：太田治孝

※本編は、『陶遊』100 号（2008 年 4 月発行）の 67 ～ 73 ページで紹介した記事を再編し、今号の特別企画にちなんで掲載するものです。

大佛塔

大佛塔焼成後、八方窯前で座る
池田満寿夫（1995 年 1 月）
撮影：太田治孝

焼き上がった大佛塔（1994 年 10 月）
撮影：太田治孝

前列左から）
大佛塔　縦 126× 横 42× 奥行き 42cm 1994 年制作 焼成：八方窯
大佛塔　縦 68× 横 42× 奥行き 40cm 1994 年制作 焼成：八方窯
大佛塔　縦 148× 横 54× 奥行き 58cm 1994 年制作 焼成：八方窯
後列左から）
大佛塔　縦 59× 横 87× 奥行き 51cm 1994 年制作 焼成：ガス窯
大佛塔　縦 74× 横 72× 奥行き 73cm 1994 年制作 焼成：ガス窯
大佛塔　縦 68× 横 70× 奥行き 68cm 1994 年制作 焼成：八方窯

池田満寿夫と「もう一度話したい」

仕事を超えてつき合いが深まっていった仲間、楽しいことは何でもいっしょだった。
縁あって、気が合って……。親交が深かった方々に17年を経た今、池田満寿夫との思い出を語っていただいた。

伊勢崎 淳

焼締と粗土に辿りついたことが、池田さんの陶表現の新たな展開につながった。

池田さんに初めて会ったのは1973年頃。

友人の岡山出身の造形作家、岡崎和郎さん※1の自宅であった。池田さんと岡崎さんのふたりは20代からの友人らしく親しかった。「学芸員かと思った、陶芸家ですか」。初対面の時、池田さんが私に言った言葉である。

1977年の夏、私は岡崎さんと一緒に一カ月あまりアメリカへ旅した。ちょうど、池田さんが芥川賞を受賞した日にニューヨークに着いた。池田さんは、本当にやさしく気配りをしてくれ、空港まで迎えに来てくれた。イーストハンプトンのアトリエに着くと、その夜は、ちょうど居合わせたカメラマンの吉田ルイ子さん※2を含め、ムール貝を蒸した手料理で賑やかに夜遅くまで話が弾んだ。

多忙な池田さんのアトリエで何日間か過ごした後、陶芸家のターノさんと岡崎さんの三人で、アスペンに旧知の現代美術のコレクター、ジョン&キミコ・パワーズ夫妻※3を訪ねた。そこから車でアメリカを横断し、ニューヨークに帰り、画家の河原温さん※4のロフトに二週間ほど滞在した。池田さんの友人の画家、川島猛さん※5のアトリエでは、池田さんを交えて麻雀大会。それは「NYのアーティストたち」として日本で放映された。

1984年から日本のエーゲ海と言われている牛窓で、「JAPAN牛窓国際芸術祭」が9年にわたって毎年開催された。そのゲストに池田さんが毎年出席し、備前に近いので、その都度来られるようになった。

ある時は、人形作家の四谷シモン※6ら10人ほどで、松茸を胃が張り裂けんばかりに食べたり、牛肉のすき焼きを囲み、一晩中親しい友人たちと論談するのも楽しかった。

その頃、私の仕事場で茶盌だけを50点くらい作ったことがある。池田さんは自由な人である。遊びながら型にはまらない茶盌を作った。深夜まで一人で作陶している姿が印象深く残っている。

備前市にある株式会社ヨータイ※7というレンガ会社の工場を借りて、池田さんは当時頼まれた狭山市庁舎の陶壁を制作したり、また、坂出のゴルフ場に、私は石彫、池田さんは大きな陶壁を手掛けた。

1994年、私は心臓発作のため、岡山日赤に入院した。ある日、突然池田さんが見舞いに来てくれた。誰に聞いたのか、未だにわからない。この頃、池田さんは岩手で野焼きを始め、陶作品は大きく変貌していく。焼締という縄文以来の技法により、やきものの本質的なものが土と炎の中にあると見抜いていたからだろう。炎の中には、創造と破壊のエネルギーがある。最初の野焼きは見事に失敗した。焼成に対する技術的な問題であった。

この破壊された作品群は、見事な写真で一冊の作品集となって生き返った。池田さんは本の中で、芭蕉が平泉で詠んだ句「夏草や兵どもが夢の跡」※8を引用している。

熱海の制作現場を拝見したことがあるが、素材の土の変化に驚いた。土の製法の知識をどこから仕入れたのか、シャモットの入った粗い土を使用していた。作品は土という物質の持つ力強さと、叩きの技法に焼締が魅力となっている。

京都大丸で「般若心経」展が開催され、私も初日に観に行った。上機嫌で本にサインをしてくれた。

私は焼締と、この粗土に辿りついたことが池田さんの才能と結びつき、陶表現の新たな展開につながったと思っている。

ある日、東京の私の定宿のホテルに突然電話があり、「アンソニー・カロ※9を観に行こう」と誘われた。会場では無言で回ったが、最後に「伊勢崎さん、やられたね」と笑っていた。池田さんが次の展開を目指した一瞬だった。

増穂登り窯の太田さんから、ある日、突然の悲報が入った。告別式では、祭壇に六曲一双屏風「天女乱舞」が飾られていた。

池田さんのあまりにも早い死が惜しまれる。

※1　1955年、早稲田大学文学部芸術学科卒業。早稲田大学文学部大学院在学中に鉄の彫刻を始める。読売アンデパンダン展への出品を経て、1963年、西洋の物の見方を東洋の見地から補足する概念「御物補遺」を構想し、以来、制作理念として続く。電球や人形などの形を反転させたり変形する作品などを制作し、物と空間に対する新しい見方を示した。

※2　1938年、北海道出身の写真家、ジャーナリスト。慶應義塾大学法学部卒業。NHK職員、朝日放送アナウンサーを経て、フルブライト交換留学生として、アメリカの大学で学び、10年間ニューヨークに在住する。ニューヨーク在住中にハーレムで撮った写真が高く評価され公共広告賞を受賞する。帰国後は写真展「ハーレム Black is beautiful」を開催。

※3　ジョン・パワーズ（1916〜99年）はアメリカの実業家。63年にキミコさんと結婚。夫妻は日本美術と現代美術の分野で世界有数のコレクターとして知られる。ジョン氏が亡くなった後の2011年、キミコさんはコロラド州の自邸近くにジャスパー・ジョーンズ（1930年〜）の作品研究・公開を目的に「パワーズ・アート・センター」をオープンさせた。

※4　1932年、愛知県河谷市生まれ。日本出身の美術家。コンセプチュアル・アートの第一人者として国際的にきわめて高い評価を受けており、日本出身の現代美術家のなかで世界的にもっとも著名な1人である。

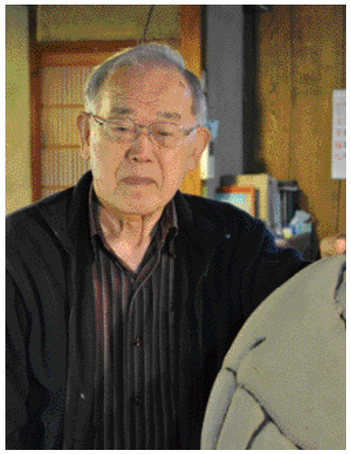
※5　1930年高松市生まれ。武蔵野美術専門学校（現武蔵野美術大）油絵科を中退して、63年に渡米。以後、現在までニューヨーク在住。ニューヨーク・アート・スチューデント・リーグで学んだ。71年と2002年に県文化会館で、89年には高松市美術館でそれぞれ回顧展。四国新聞文化賞（87年）、県文化功労賞（07年）、よんでん芸術文化賞（09年）を受賞。04年からKAGAWAアンバサダー。10年と今年の瀬戸内国際芸術祭に参加する。

※6　1944年生まれ。人形作家。俳優。73年に初の個展を開催後、78年にエコール・ド・シモン（四谷シモン人形学校）を開設。唐十郎の「状況劇場」の舞台に立つなど役者としての顔も持つ。

※7　耐火物やファインセラミックスの製造などを行う企業である。大阪府貝塚市に本社がある。

※8　松尾芭蕉が『おくのほそ道』の旅の途中、平泉（今の岩手県平泉町）で詠んだ句。今見れば、この辺りは夏草が生い茂っているだけだが、かつては英雄義経や奥州藤原氏が功名と野望を夢にみた場所。そんな繁栄や栄華もむなしく一時の夢に散ってしまい、今はただ、自然の営みの中で夏草が無心に茂るばかり。生い茂っては枯れを繰り返す夏草の情景を、人の夢の儚さを象徴しているという感傷句である。

※9　イギリスの彫刻家。1924年、ロンドン郊外サリー州生まれ。ケンブリッジ大学で工学、工芸学校で彫刻を学び、世界的な彫刻家ヘンリー・ムーア氏に師事。1960年代に鉄を溶かして彩色した抽象彫刻を発表し、注目された。建築と彫刻を結びつけた「スカルプテクチャー」をはじめ、新たな素材や様式に挑戦した。2013年、心臓発作のため死去、89歳。



伊勢崎 淳（いせざき じゅん）
日本の陶芸家。備前焼の人間国宝。
1936年、伊勢崎陽山の次男として岡山県備前市に生まれる。
同じく陶芸家の伊勢崎満は兄。
1959年、岡山大学教育学部特設美術科卒業。
1960年、伊勢崎満とともに姑耶山古窯跡に中世の半地下式穴窯を復元。
1966年、日本工芸会正会員。
1978年、岡山大学特設美術科講師に就任。
1998年、岡山県重要無形文化財保持者に認定。社団法人日本工芸会理事および日本工芸会中国支部幹事長に就任。
2004年9月2日、重要無形文化財保持者（人間国宝）認定。

受賞歴
1981年 金重陶陽賞
1993年 岡山県文化奨励賞
1996年 山陽新聞賞（文化功労賞）
2005年 岡山県文化賞

出版物
『備前 土と炎の輝き』伊勢崎淳 著（山陽新聞社、2005年）

太田治孝

「般若心経」は版画よりも陶作品がいい。土は池田さんの考えにぴったりの素材だった。

池田さんは当初、陶作品の焼成にガス窯、電気窯を使用していた。

１９９０年、増穂登り窯が開窯。薪などの準備のため、実際の焼成は１９９１年春となったが、登り窯、穴窯での焼成が始まると、一部の陶作品以外はほとんどが薪窯焼成となった。

１９９３年６月に「満寿夫・八方窯」を築窯すると、大作品（陶土20kg以上）のほとんどをこの八方窯で焼成した。焚き口は正面と左右に二カ所ずつ、合計五カ所から薪を投入する変則型単窯薪窯だ。正面からは、大人２人が作品を抱えて、窯詰め可能なサイズとなっている。窯内は１m80cmで、立ったままで作業ができる。薪窯としての焼成効率は良くないが、焼き上がりの表情は池田さん好みであった。

八方窯築窯後、「古代幻視」シリーズを焼成した。この陶シリーズでの成功が「般若心経」制作へと続いている。池田さんは、「古代幻視」シリーズがかなり気に入ったようで、完成した陶作品をモチーフにして、エッチング版画シリーズも制作してしまった。

１９９３年の春頃に、ある出版社から「般若心経」をテーマにした版画作品制作の依頼が入る。池田さんは構想を練っていく中で、表現形式は版画よりも陶作品が良いと決断した。「土と炎」による表現は、縄文を意識し、日本回帰が始まったと言っていた池田さんには、テーマの造形化、視覚化にぴったりの素材だったのだろう。

即座に制作はスタートした。２年半の間に、約１８００点の作品を制作して焼成した。

大佛塔などの大作は、増穂登り窯の工房で中小の作品は熱海の満陽工房（現・池田満寿夫記念館の隣に併設）で制作し、山梨県の窯場へ運んだ。とくに大佛塔制作、焼成には苦労した様子だった。

１９９４年の夏、１００～２００kgの作品制作に一カ月を要した。このときは、動かすことが難しいと判断し、最初の１点を八方窯内で制作し、写経した。だが、あまりに制作がしずらく、残りの作品は窯の周辺での制作となった。「古代幻視」シリーズでの経験から、その後の制作はスムーズに進み、完成した。しかし、作品のサイズからして４点の大佛塔を窯詰めするのに丸２日を要した。

いま思うと、あの夏の日が、昨日のことのように思い出される。

太田治孝（おおた　はるたか）
1949東京生まれ。陶芸の究極の醍醐味ともいえる薪窯焼成が行えるように１９９０年に山梨県増穂町（現・富士川町）に登り窯を築窯。本格的な三連式登り窯や故池田満寿夫氏の八方窯、単窯、地下式穴窯等８つの窯がある。プロだけでなく、アマチュアにも開放し、陶芸体験会やコンテストを行っている。薪には間伐材を利用し、環境への配慮から２００８年「ストップ温暖化・活動コンテスト」で優勝賞受賞。

特別寄稿

佐藤陽子

ロクロは性に合わず、手びねりオンリー。叩いて、貼って、合わせる。作品はどんどんダイナミックに。

池田満寿夫と佐藤さんの歳の差は15年。ローマで運命的な出会いをし、以後、18年くらいの日々をともに歩んだ。芸能界でもおしどり夫婦として話題だったが、ほんとうにふたりは幸せそうだった。あたたかく蘇る遠い日の記憶を語る。

富有柿（ふゆがき）という、冬にでる柿を手にしている。実は大きく、中身はとても甘く美味しいが、皮は無類の堅さで形良く、まるで陶器のよう。そうだ、いつの日かこれを陶で創ってみたい。その思いが呼び水となって、やがて池田満寿夫が伊豆下田の岩殿寺窯（がんでんじがま）で１９８４年に初めて陶芸に取り組んだ、無茶苦茶楽しい夏の日々が脳裡を去来し始めた。

50歳近くまで、陶芸にはさして興味を持っていなかった。世界各国の美術館へ行っても、絵画ばかり熱心に観ていた。陶器の展示室は素通り。したがって、本人も招いてくれた窯の方々もお皿や陶板に絵付けするのだと決めつけていた。だから、気楽なものである。ところが、でき上がってみてややガックリ。なんとも稚拙さが気になり、「あまりおもしろくない」とそのときは思えた。

後年、南フランスのマドラで、ピカソが一番最初に陶芸に手をそめた一連の作品を見るチャンスがあった。やはり、造形は職人が作り、ピカソは絵付けのみ。ピカソはかなり失望したらしい。私と満寿夫は思わず顔を見合わせ、ニッコリしてしまった。

今見ると、どちらもそれなりの初々しさはあるのだ。しかし、やはりやきものは造形に多少なりとも本人が手を加えなくては面白味は出ない。ピカソもそうだが、満寿夫もそれにすぐ気づき、描く以外の手を入れるようになっていく。ロクロを回すのは性に合わなかったので、手びねりオンリー。棒で叩いて板を作り、貼って合わせる方法をとるようになると、どんどん作品はダイナミックに大きくなっていった。

２年くらい、下田へ通っていた満寿夫だが、陶芸熱が高じて熱海の自宅近くに窯を造ろうと土地を探し、やがて工房を建てた。名付けて「満陽工房」。ここで、たくさんの作品を創ったが、電気とガスの窯しか設置できなかった。したがって、モニュメントのような大作を仕上げるときは、そのつど現場近くの大工房で仕事をした。

１９９０年頃から太田治孝さんが所有する山梨県富士川町の「増穂登り窯」へ通い始め、夏は暑く冬はとても寒いこの地に『八方窯』なる窯を創造し、満寿夫は真剣に別荘を建てることを考えたほどだ。八方窯での代表作は言うまでもなく「古代幻視」シリーズと「般若心経」の膨大なシリーズである。

「般若心経」シリーズを創り終え、満寿夫は作陶に対し一時的にでも一つの区切りを感じたのだろう。「これからは陶芸は少し控えて、描く方に専念しよう。特に油絵を10年間、力を入れていく」と私に宣言した。その日、彼は世を去った。いみじくも、最後アトリエに残されていたのは、『美貌の青空』と題されたキャンバスに白、グレー、ベージュの油絵具を塗り、真っ青の陶板を貼った油と陶のコラボレーション作品15点であった。

佐藤陽子（さとう ようこ）
ヴァイオリニスト。10歳でレオニード・コーガン氏に才能を認められ、ソ連邦文化省の招きでモスクワ国利音楽院に入学。チャイコフスキー国際コンクール第３位。ロン・ティボー国際コンクール第３位。モスクワ国立音楽院を首席で卒業。パガニーニ国際コンクール第２位。声楽の分野でもマリア・カラス女史に素質を認められ、ルーマニアのブカレスト国立歌劇場から「蝶々夫人」でデビュー、絶賛を浴びる。現在、コンサート・マスコミ等の番組出演、また各出版社からの執筆活動と多忙に活躍中。

池田満寿夫の素顔

周囲の人びとの思い出、記録されていた写真……。仕事・プライベートを問わず、交友関係は実に多彩だった。池田満寿夫という人の、幅の広さを感じさせる。まだまだ語り尽くせない池田満寿夫の素顔の一片を垣間みる。

1994年 9月、レストラン「ノアの方舟」（富士川町）でカラオケを楽しむ池田さん。池田満寿夫(左)、片見通夫（中央）、安倍安人（右）。（撮影：太田治孝）

1994年・夏、八方窯内で作陶した大佛塔に写経している池田満寿夫。（撮影／太田治孝）

1993年 1月、画家の川島猛がニューヨークから満陽工房（現・池田満寿夫記念館）に遊びに来ていたところ。左上から時計回りに川島猛、佐藤陽子、池田満寿夫。愛犬の黒柴・ピカソと柴犬・ドンもいっしょ。（撮影／太田治孝）

1995年 9月、野坂昭如の妻・暘子が経営する銀座のギャルリーymA（現在はない）にて。左から池田満寿夫、宮澤壮佳（初代池田満寿夫美術館館長）、太田治孝（増穂登り窯）、野坂昭如。（撮影／太田治孝）

1995年 2月、池田満寿夫、61歳のバッピーバースディ。熱海の自宅にて。右が池田満寿夫、左が佐藤陽子。（撮影／太田治孝）

1995年 1月、ピーター・ヴォーコス展のレセプション会場、池袋セゾンミュージアムにて。左から佐藤陽子、池田満寿夫、ピーター・ヴォーコス。（撮影／太田治孝）

池田満寿夫の本

20代から詩やエッセイを発表、美術評論も手掛けるなど、池田満寿夫の文才は美術・文学関係者から注目を集めていた。小説、随筆、対談、評論……。駆け抜けるように生きた池田満寿夫が、私たちに残していった本。

エーゲ海に捧ぐ

「エーゲ海に捧ぐ」は第77回芥川賞受賞作品。エーゲ海にいる彫刻家を責め立てる、日本の妻からの長い国際電話。彫刻家の前には二人の白人女性が。卓越したシチュエーションと透明なサスペンスで第77回芥川賞に輝いた作品。表題作ほか二篇を含む、衝撃の愛と性の作品集。（1977年発行 角川書店）

模倣と創造 偏見のなかの日本現代美術

池田満寿夫は本中で「すべての創造は模倣から出発する。そして創造が真の意味の創造であるためには、その創造のための模倣が、創造的模倣でなければならない」と述べている。模倣こそが創造の出発点であり、創造や独創性とは工夫の産物であると。（1969年発行 中央公論社）

思考する魚

雑誌などに書いたエッセイをまとめたもので、池田満寿夫の考え方や感覚がよくわかる。ヘンリー・ミラーをはじめ国内外の芸術家仲間との交流、各種芸術作品論が展開され、間奏曲のように笑劇一幕が挿入される。取材メモのようなスタイルをとった新鮮な文体、自由な感性、パロディ精神の躍動あふれる1冊。（1974年発行 番町書房）

美の値段

タイトルからもわかるように、池田満寿夫は「絵の値段」ということを、画商、画壇、流通、市場という作品を取り巻くあらゆるシーンの 90年時点での在り様を説明し、そして作家自身との絡み合いを解き明かそうとしている。（1990年発行 光文社）

複眼の思考

絵画、デザイン、文学、版画等多才な活躍で知られる池田満寿夫が、芸術の各ジャンルへ鋭いまなざしをまんべんなく行きわたらせ、自らの絢爛たる美の世界を構築した芸術論集。（1980年発行 白水社）

コラージュ論

ピカソが「芸術は破壊の集積である」といったとき、現代芸術は、素材や主題や方法において、完全な自由を獲得し、まさしく物質になった。実際に自作を破壊したわけではないが、ピカソは観念のうえで美術史を解体し、実際にスクラップを拾い集め自作に参加させることで、従来の美学を破壊した。この「物質と化した現代芸術」をコラージュの思想と技法の跡をたどることによって解剖する。（1987年発行 白水社）

池田満寿夫の魅力を知る手がかりたち

般若心経シリーズ約750点を所蔵するパラミタミュージアム。

公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム
三重県三重郡菰野町大羽根園松ヶ枝町 21-6　Tel.059-391-1088
開館時間：9:30 ～ 17:30（入館は 17:00まで）年末年始は休館。
また展示替え期間は一部閉場となる（詳しくは美術館にお問い合わせください）。
入場料：一般 1,000円（4枚セット 3,000円）大学生 800円・高校生 500円・中学生以下無料 ※障害者手帳をお持ちの方は無料（美術館受付にてご提示ください）。

パラミタミュージアムでは、池田満寿夫の陶彫・般若心経シリーズと版画作品が常設展示されている。パラミタとは、梵語の「波羅蜜多」に由来し、「迷いの世界である現実世界の此岸から悟りの境地である涅槃の彼岸に至ること」を意味する。

オーナーで名誉館長の小嶋千鶴子さんが、池田満寿夫の般若心経シリーズの写真集だけを見て購入を決めたとか。

般若心経シリーズは、館内1階の第1室から第3室に展示されている。照明を落とした展示室に入ると、経文の文字を一つずつ印刻した「心経碗」が全部で276個あり、息をのむ。黄金色に装飾された「地蔵」。「佛画陶板」に描かれた顔はガンダーラの香りが漂う。高さ1mほどの6体の「大佛塔」は、窯の焚き口を野焼き風に広げて焼いたという。刻々と変化していく佛塔の姿を池田満寿夫は目の当たりにし、どう思ったのだろうか。この般若心経シリーズが、1点も欠けることなく、こうして見られるというのは幸せなことである。

般若心経シリーズ。菩薩の顔が刻まれた「佛塔」や「大佛塔」など展示されている第 3室。

般若心経シリーズ「心経陶片」や「心経碗」などが展示されている第 1室。

美術館内にあるミュージアムショップ。各アーティストの作品を中心に、地元三重の工芸品も販売されている。パラミタミュージアムでしか購入することができない書籍もある。

般若心経
池田満寿夫の世界
パラミタミュージアムにて常設展示する陶彫「般若心経シリーズ」全作品を収録。
（2006年 7月 1日発行／A4変形・並製本／総頁 152頁）
1,000円（税込）

池田満寿夫
版画コレクション
20代から全盛期までの作品が網羅された国際的版画家・池田満寿夫の版画作品 204点を収録。
（2006年 1月 2日発行／A4変形・並製本／総頁 94頁）
1,000円（税込）

生誕80周年記念「池田満寿夫」展
会期：5月22日（木）～6月22日（日）※会期中無休
会場：パラミタミュージアム
内容：ウアイオリニスト佐藤陽子さん所蔵の池田作品とパラミタミュージアムが所蔵する版画、陶芸、書などを一堂に展示し、さまざまな分野で活躍した池田満寿夫の芸術性に注目した展覧会を開催。
住所：三重県三重郡菰野町大羽根園松ヶ枝町21-6
TEL：059-391-1088

遺作の版画・書・陶・ブロンズからお気に入りの書物まで、作陶する日々の暮らしまでもが伝わる池田満寿夫記念館。

池田満寿夫記念館
熱海市下多賀 1130-1　Tel 0557-68-3258
開館時間:毎週土・日・月曜・祝日 9:00 ～ 16:30（入館は 16:00まで）
入場料:大人 510円・中高生 300円（20名以上の団体は 100円引き）

満陽工房で制作された陶版や花器、熱海の海岸で行った野焼きの壺など、熱海ゆかりの作品を中心に、版画・書・陶・ブロンズなどが展示されている。

工房奥にある池田満寿夫の書庫。生前愛読していた『藝術新潮』『みづゑ』『目の眼』『炎芸術』『版画芸術』など、歴史ある書物が今も大切に保管されている。

池田満寿夫記念館と隣接するアトリエ「満陽工房」内。

1982年12月、熱海に移り住んだ池田は、1986年12月に新たな作陶の場として下多賀に工房を構える。工房名は、満寿夫の「満」と佐藤陽子の「陽」をとって「満陽工房」。その後「芸術は私有するものではなく多くの人たちと共有するもの」という持論から作品展示場を増築、池田の死後、満陽工房は熱海市に寄贈され、「池田満寿夫記念館」として一般公開されている。工房で製作された陶板や花器、版画、書、ブロンズなどが展示されている。

読者プレゼント

増穂登り窯・太田治孝氏のご好意により、図録『池田満寿夫　知られざる全貌展』（2008年発行 毎日新聞社）を読者5名の方にプレゼントさせていただきます。
［応募方法］官製ハガキに左下の応募券を貼り、お名前、年齢、ご住所、電話番号、今号へのご意見、ご感想を明記の上、応募ください。当選者の発表は、品物の発送をもって替えさせていただきます。
［応募先］〒108-0073 東京都港区三田1-1-15-4F
㈱エスプレス・メディア出版「陶遊」142号　図録プレゼント係

〝IKEDA+SAITO+HASEKAWA @ SHINOBAZU LABO〟
会期：開催中～5月2日（日祝休廊）
会場：不忍画廊
内容：モダンアートの枠を超え、強いオリジナリティで現在も人気を博す長谷川利行、斎藤真一、池田満寿夫。1960年の画廊オープンから50年間紹介し続ける3作家の初競演。名作と名作をミックスさせた実験的な展示を試みる。
住所：東京都中央区日本橋3-8-6 4F　TEL：03-3271-3810

TY142 応募券
図録プレゼント